論　文

忘れられた中国空襲
――アメリカ軍による中国国内空襲を考える――

内田　知行（大東文化大学名誉教授）

Forgotten Air Raids :
Air Raids on Japanese Occupied Areas in China by the United States Air Force

Tomoyuki UCHIDA

はじめに

本稿では、中共系地方政権の機関紙が記載する空襲記事を取り上げて、アメリカ軍による中国国内空襲について考察する。これまでの中国や日本における研究史をたどると、日中戦争時代の「中国空襲」研究は日本軍による中国空襲を指してきた。それは、侵略国日本の戦争責任研究の一環であった。たとえば、瑞慶山茂編（2014）『法廷で裁かれる日本の戦争責任』高文研、に一瀬敬一郎の論文「中国･重慶大爆撃と日本の戦争責任」が掲載されている如くである。2020 年 8 月 1 日には、NPO 法人「『重慶大爆撃』を語り継ぐ会」結成集会が東京で開催された。当日、伊香俊哉により記念講演「重慶爆撃研究のこれからと NPO の役割」が行われた。伊香は長らく中国空襲研究の第一線で研究を続けてきた研究者の一人であるが､講演では空襲研究の「未解明の課題」が列挙された。それらのうちの一つが､「戦争末期のアメリカ軍による中国国内の爆撃被害」であり､「日本軍基地･飛行場・日本経営の経済拠点への爆撃」によって「周辺住民にも被害が及んだ」可能性を指摘している。本稿は、伊香の指摘を念頭においてめざした、これまでの研究史では空白だった考察である。

本稿の材料は、山西省東南部の太岳軍区を統治した中共系抗日政権の機関紙『太岳日報』（1940 年 6 月 7 日創刊、1944 年 4 月 1 日以降『新華日報　太岳版』）である。この機関紙に着眼する理由について述べる。第 1 に、この機関紙には日本軍機による中国空襲だけでなく、連合国軍機（主としてアメリカ軍機）による日本本土空襲とともに中国国内空襲の経過も報道されていた。第 2 に、中国国内空襲の報道では、空襲経過とともに報道の出所（情報源）も記されていた。第 3 に、それを確認することによって、中共系地方政権が連合国軍機による中国国内空襲をどのように伝えていたのかを理解することができる。本稿では、香港台湾空襲も中国国内空襲の一部として取り上げることにする。主たる史料源が『太岳日報』であるので、中国国内の被空襲地域も限定的である。それゆえに、本稿は中国国内空襲をめぐる初歩的な考察にすぎない。

なお、『太岳日報』がアクセスの難しい新聞史料であることを考慮して、本稿では記事本文を日本語訳しないで中国語原文（簡体字を使用）を紹介する。原文には最低限の日本語コメントを付することにする。

第 1 節　『太岳日報』の報道する中国国内空襲の記事数

空襲情報の出所別に記事を 3 種に分類してみる。第 1 種は在華アメリカ軍司令部の広報からでて『太岳日報』に伝えられた記事、第 2 種は中国共産党の後方根拠地、陝甘寧辺区の延安の中共メディアから伝えられた記事、第 3 種は太岳区内あるいはその周辺地方から『太岳日報』に伝えられた記事である。

(1) 在華アメリカ軍司令部公報からでて『太岳日報』に伝えられた記事

ここでは「在華アメリカ軍司令部」と記すことにするが、具体的には、「中国・ビルマ・インド戦域アメリカ陸軍司令部」「スティルウェル中将駐華司令部」「スティルウェル将軍司令部」「中国戦区アメリカ空軍司令部」などの名称として出てくる。ジョゼフ・W・スティルウェル（1883 ～ 1946）は 30 代に語学将校として 4 年間中国勤務をした人物で、アメリカ陸軍きっての中国通だった。その後も彼は中国勤務の経験を積み、1935 年から約 4 年間はアメリカ陸軍の駐華武官として中国を実地調査し、1939 年 9 月に帰国した。アジア太平洋戦争勃発後の 1942 年 1 月下旬、スティルウェル（中将）は陸軍参謀総長マーシャルによって、中国・ビルマ・インド戦域派遣アメリカ陸軍部隊司令官、中国戦域最高司令官参謀長、武器貸与法監督官、すべての連合国戦争会議アメリカ代表に任命された。そのときの職務と目的は、ビルマルートを維持し、「彼に委ねらるべき中国軍部隊を指揮」し、「中国軍の戦闘能力の向上を助け」「戦争の遂行のための、アメリカの中国政府援助をより効果的たらしめる」ことにあった【1】。スティルウェルは、インド経由で 1942 年 3 月上旬、重慶に着任した。このとき将校 35 人、下士官兵 5 人が同行したほかに、アメリカ陸軍省は技術者・教官約 400 人を海路派遣した【2】。こうして彼は中国戦域最高司令官・蒋介石の参謀長兼在華アメリカ軍司令官になった。のちに、戦意を阻喪した中国国民政府地上軍の改革や中共軍部隊の評価などをめぐって蒋介石とスティルウェルとのあいだには修復不能の対立が生じ、ついには蒋介石がアメリカ政府にたいしてスティルウェル参謀長の解任要求をする事態に至った。1944 年 10 月中旬スティルウェルは召喚された。彼が担当した中国・ビルマ・インド戦域は中国とビルマ・インドの 2 戦域に分割され、中国戦域ではウェーデマイヤーが総統付参謀長兼在華アメリカ軍司令官を継いだ【3】。1943/08/10 の「美机轰炸香港九龙」や 1943/09/07 の「美机连炸广州汉口」などの空襲記事では「スティルウェル」がでてくるのに、1945/02/01 の「盟机连续出击 , 奇袭北平机场」では「中国戦区アメリカ空軍司令部」と記述されていたのは、以上の経過による。

さて、『太岳日報』に空襲記事が掲載されたルートは以下の 3 種だった。

[A]《在華アメリカ軍司令部公報→中央社重慶電→新華社延安電→太岳日報》

このルートは計5点だった。発行年月・中国語記事見出し・主たる空襲対象（カッコ内）を示すと、次の通りである。

1942/08/05「衡阳三度空战，击落敌机十七架」（衡陽）

1942/08/10「盟机再袭汉口，弹中敌码头船只货栈」（漢口）

1942/08/12「盟机百战不疲，再炸广州敌机场」（広州）

1942/08/19「盟机空袭岳阳」（岳陽）

1942/09/09「盟机出击赣北，威力封锁敌水陆交通」（江西省饒州）

[B]《在華アメリカ軍司令部公報→新華社延安電→太岳日報》

このルートは計8点だった。以下の記事である。

1942/08/19「盟军神鹰继续获胜」（衡陽）

1943/08/10「美机轰炸香港九龙」（香港九龍）

1943/09/07「美机连炸广州汉口」（広州、漢口、香港九龍）

1943/09/10「美驻华空军，活跃华南上空，更番炸敌水陆交通」（ハノイ、宜章、南粤漢鉄道沿線）

1945/01/27「美机广泛出击，同蒲平汉线均被炸」（同蒲線、平漢線、武漢、広州）

1945/01/27「美机广泛出击，同蒲平汉线均被炸」（同蒲線、平漢線）

1945/02/01 「盟机连续出击，奇袭北平机场，洛阳新乡均被炸」（北平、石家荘、開封、洛陽）

1945/02/13「盟机袭击，北平济南」（北平、済南）

[C]《在華アメリカ軍司令部公報→中央社重慶電→太岳日報》

このルートは1点のみだった。

1942/07/24「盟机空袭广州再奏凯歌，毁敌机六十架」（広州、九江）

これとは別に、東南アジアのアメリカ軍司令部から発出された記事が1点あった。すなわち、

[D]《在外アメリカ軍司令部公報→新華社延安電→太岳日報》

1943/09/13 「盟机轰炸缅境，毁敌船百三十艘」（ビルマ国境地帯）

以上のように、在華アメリカ軍司令部から出た公報は国民政府の中央社、延安の中国共産党（中共）新華社をへて『太岳日報』に伝えられるか、在華アメリカ軍司令部から中共の新華社をへて伝えられる事例が多かった。

(2) 延安（陝甘寧辺区）の新華社から『太岳日報』伝えられた記事

以下の5点だった。しかし、情報源が在華アメリカ軍司令部公報であったにもかかわらず、言及されなかった場合もあったかもしれない。

1943/09/28「盟机勇猛作战，炸毁敌艦三十艘，塌石灰窑铁矿，死伤敌海军两千人」（湖北・安徽省南部・江西省北部の地方都市）

1944/07/10「争夺衡阳战斗未已」（衡陽）

1944/08/22「美国脱险飞机师，函谢东江游击队」（広東省東江地区、アメリカ軍パイロットの救出）

1945/01/07「盟机炸济南」（済南）

1945/01/09「美机五百架 , 猛烈轰炸台湾」（台湾、沖縄）

(3) 太岳区内あるいはその周辺地区から『太岳日報』に伝えられた記事

［E］《太岳区内→太岳日報》

以下の 10 点だった。すなわち、

1944/06/13「我机炸洪洞 , 敌人死了十名」（山西省洪洞県）

1944/08/28「盟机再炸临汾 , 敌司令部门口中弹」（臨汾）

1944/11/05「盟机四架轰炸临汾 , 敌中代师团部门前中弹」（臨汾、洪洞）

1944/11/17「盟机连炸同蒲沿线 , 伪军四十人反正」（南同蒲線沿線地方都市）

1944/12/19「盟机轰炸同蒲沿线 , 毁敌火车头十七个」（臨汾）

1945/02/27「盟机连炸同蒲线 , 又毁火车头七个」（同蒲線沿線）

1945/03/05「盟机猛烈轰炸临汾 , 敌伪死伤二百余人」（臨汾）

1945/04/23「盟机配合我军攻势 , 连炸白晋同蒲沿线」（白晋線・同蒲線沿線）

1945/04/29「盟机火烧临汾城 , 毁敌伪房屋仓库数百间」（臨汾）

1945/06/09「本区周围 , 盟机连续猛炸敌伪」（霊石、臨汾、平遥、沁県）

［F］《周辺地区→太岳日報》

以下の 1 点のみだった。すなわち、

1942/08/31「沙市敌懼空袭」（湖北省沙市）

(4) まとめ

以上を整理してみると、31 件を数えた。すなわち、

ルート	記事数	ルート	記事数
在華米軍・中央社・新華社	5	在華米軍・新華社	8
在華米軍・中央社	1	在外米軍・新華社	1
新華社	5	太岳区内	10
周辺地区	1	合計	31

在華アメリカ軍司令部公報による空襲記事と太岳区内から発出された空襲記事とは、見出しの表現法や内容が異なっていた。この点は第 5 節で分析する。

第 2 節　在華アメリカ陸軍第 10 航空隊時代（1942 年 7 月～ 1943 年 3 月）の中国国内空襲

(1) 中国空軍アメリカ志願隊と在華アメリカ陸軍第 10 航空隊の時代

本節では、「在華アメリカ軍司令部」の下でどのように在華アメリカ航空部隊の設置、統合、再編が実施されたかを述べておく。

抗日戦争が勃発した当初、中国の空を守ったのは 1937 年 11 月に設立されたソ連空軍志願隊だっ

た。国民政府は1937年から1942年初めまでの期間、ソ連から爆撃機328機、長距離爆撃機30機をふくむ1235機をソ連から買い付けてソ連空軍志願隊と中国空軍の作戦に利用した。日本軍侵攻に対応して武漢防衛戦や南昌防衛戦に参加し、国民政府の重慶への撤退後は重慶や南寧の防衛戦にも参加した。このように、ソ連空軍志願隊は、日本軍とのあいだで多くの空中戦を戦ったが、犠牲も大きかった。やがてヨーロッパの戦場における独ソ戦勃発の危機が高まり、1941年初めには解消されてロシア人は帰国した。残された機体や武器装備は中国空軍に引き渡された【4】。

ソ連空軍志願隊と入れ替わって中国の空を守るようになったのが、1941年8月に組織された「中国空軍アメリカ志願隊」（American Volunteer Group）だった。この志願隊は、英語の頭文字をとって「AVG部隊」と呼称された。しかし、このときにはまだスティルウェルを司令官とする中国・ビルマ・インド戦域派遣アメリカ陸軍部隊は編成されていなかった。発足した「AVG部隊」の隊長にはクレア・シェンノート（当時は大佐）が任じられた。3つの戦闘機中隊の下にアメリカからリクルートされたパイロットが110人、整備や後勤関係スタッフ150人に加えて中国空軍から派遣されたスタッフが270人配置された。本当の戦闘機パイロットは17人にすぎず、残りは戦闘機に乗った経験はなかった。パイロットは、毎月の給与600米ドル、日本軍機撃墜1機につき500米ドルのボーナスに飛びついたのである。日本軍に知られぬようにAVG部隊に参加した人びとはアメリカ軍の退役軍人と予備役軍人だった。彼らの中国の戦場への派遣は、ルーズベルト大統領が1941年4月15日に署名した秘密の許可にもとづいていた。当初国民政府に供与された機体はカーチス・ライト社のP40戦闘機が25機、のちに99機追加された。AVG部隊は雲南省昆明を基地として昆明地区を防衛するほかに、雲南〜ビルマ公路の日本軍攻撃を担当した【5】。

AVG部隊とその後継の「アメリカ空軍駐華特遣隊」「アメリカ陸軍第14航空隊」はのちに「フライングタイガー」（飛虎隊）と呼称されることになるが、これは宋子文の提案によったという。アメリカ人が機体に描いたのはサメだったが、中国の民衆は虎に見た。鷹（hawk）をシンボルとするアメリカ空軍にたいして「翼を持った虎」の勇猛さを主張する意味もあったという【6】。

当時のアメリカはまだ対日参戦していなかったから、AVG部隊は「非政府機構」によって結成されたものであり、隊員たちは秘密裏にビルマ経由で中国西南部に入国し、中国政府に雇用される志願者の名義で参戦した。第2次大戦後も、志願隊の兵士は合衆国退役軍人の経歴を得ることはできなかった。1991年7月になってアメリカの国防総省は1941年12月の対日宣戦以降、志願隊兵士をアメリカ軍兵士として承認することになる【7】。

『太岳日報』にはAVG部隊の活動関係史料はない。初陣はアメリカの対日宣戦以降だった。12月20日、AVG部隊の戦闘機24機は昆明機場を空襲した日本軍機10機のうち6機をビルマ国境で撃墜した。続いて1941年12月23日、ラングーンを空襲した54機の日本軍機に対して英国空軍と協力して、7機を撃墜し、2機を損傷させた【8】。

1942年7月4日、AVG部隊は解散して正式に在華アメリカ陸軍第10航空隊の中に再編された。第10航空隊の下に編成された第23戦闘機大隊は解散されたAVG部隊を中核としていた。当初は第74・75・76の3個戦闘機中隊が隷属したが、のちに第16戦闘機中隊（第51戦闘機大隊所属）

をくわえた 4 個中隊となった。第 10 航空隊司令官はクレイトン・ビセルで、第 23 戦闘機大隊の指揮官にはシェンノートが任じられた。シェンノートは 1942 年 4 月 9 日には合衆国退役大尉から臨時大佐に昇格し、4 月 15 日には准将に昇格した【9】。

第 23 戦闘機大隊、第 16 戦闘機中隊、第 11 爆撃機中隊によって「アメリカ空軍駐華特遣隊」が編成され、指揮官にはシェンノートが任じられた。駐華特遣隊は編成序列では第 10 航空隊に所属したが、中国国内の作戦行動では中国空軍の指揮を受けつつ、中国空軍と協同作戦を担当する連合国部隊として位置づけられた。北インドから雲南省昆明に至る航空輸送の防衛や中国国内の日本軍機への攻撃、中国国内・台湾・タイ・インドネシア・ビルマなどの日本軍基地の破壊などを任務とした。しかし、1942 年 9 月末まで、特遣隊のパイロットは 38 人、使用可能な軍機は 34 機にすぎず、日本の航空軍事力よりも圧倒的に劣っていた。特遣隊の指揮官シェンノートと第 10 航空隊司令官ビセルとのあいだに軍機の供給をめぐって摩擦がたえなかった【10】。1943 年 3 月 10 日に特遣隊が第 10 航空隊から切り離され、アメリカ陸軍第 14 航空隊が編成されると、中国国内空襲の主体も第 14 航空隊に移った。

(2) 在華アメリカ陸軍第 10 航空隊による中国国内空襲

■ 1942/07/24「盟机空袭广州再奏凯歌 , 毁敌机六十架」

重庆二十日电 : 驻中缅印美国陆军司令部二十日发表第十五号公报开称 : 盟国轰炸机曾于七月十八日击袭广州日机场 , 日方猝不及防 , 机场上集中击机五六十架俱未及起击 , 当经我机予以轰秭翊敌机纷纷中弹。我轰炸机飞离机场之时 , 场上有大火六起。七月十九日 , 盟机曾炸临川日陆军司令部 , 敌军事目标附近发生大火数起 , 卓著战果。两次轰炸 , 盟机俱无损失。

驻中缅印美军司令部公报称 : 本月二十日 , 每机筹击袭九江附近 , 敌舰只被炸沉一千吨至二千吨者两艘。

➡ 1942 年 7 月 4 日に正式に設立された「在華アメリカ陸軍第 10 航空隊」（司令官クレイトン・ビセル）による空襲作戦である。1941 年 8 月に組織された「AVG 部隊」（隊長シェンノート）は、第 10 航空隊の下に第 23 戦闘機大隊として再編され、対外的には「アメリカ空軍駐華特遣隊」を構成した。この記事では、7 月 18 日、爆撃機が広州日本軍飛行場を空襲したとある。7 月 20 日には、江西省九江の軍港に停泊する軍船 2 隻を撃沈した。

■ 1942/08/05「衡阳三度空战 , 击落敌机十七架」

新华社延安一日电 : 中央社渝电 : 史蒂威儿中将 , 一日在司令部发表第二七号公报内称 : 昨晨有日本新式战斗机二八架 , 企图突破衡阳防空网 , 当与美方战斗机遭过 , 日机九架为我方所击落 , 另有一架中弹冒烟逃去 , 或已被毁亦未可知。美方损失飞机三架 , 惟驾驶人员全无恙 , 有一架正在机场上待修。七月三十日 , 亦曾有敌新式零式战斗机二十七架掩护炸击机三十四架进击 , 美方战斗机即行迎击 , 击毁日机四架 , 另有三架恐亦告损失 , 我方损失飞机一架 , 惟驾驶人员无恙。尾随于战斗机以后之日方击炸机 , 乃于跟衡阳三十里之处与散追日方战斗机会合 , 未定目的地执至綌击 , 同日佛晓以前 , 有日本击炸机九架击袭衡阳 , 美机立即起飞迎击 , 击落日方击炸机及战斗机十七架 , 另有四架或亦已为击毁。

➡ 7 月 30 ～ 31 日に「第 10 航空隊」基地が置かれた湖南省衡陽基地を日本軍機が空襲した。「アメリカ軍戦闘機」が迎撃したとあるので、シェンノート隊長の駐華特遣隊が空中戦を展開したのである。

■ 1942/08/10「盟机再袭汉口，弹中敌码头船只货栈」

新华社延安五日电：中央社重庆五日电：据史蒂威尔中将司令部第三十号公报称：美轰炸机于八月，进击汉口附近敌码头，船只货栈均告命中，六时半至八时半之间日机进袭桂林，据报告美战斗机击落日机二架，又有一架为高射炮击毁，粤各界以盟机连日出动，表示欣慰，决定由党政军高级长官组慰劳团，于坐车节日分赴各地，以贵重礼物及现金十五万元慰劳我盟机战士。

➡ 8 月初め、第 10 航空隊爆撃機による漢口港湾の空襲。同じころ、日本軍機による第 10 航空隊基地の一つ桂林基地にたいする空襲とそれに対する「アメリカ軍戦闘機」の空中戦の言及がある。

■ 1942/08/12「盟机百战不疲，再炸广州敌机场」

延安九日电：中央社重庆七日电：史蒂威尔驻华司令部三十一号公报称：六日下午美轰炸机于战斗机卫护下进袭广州附近之天河敌机场，敌方毫无准备，结果地上敌机被毁者至少十架，并有无数炸弹命中跑道，美机安全归来。

新华社延安八日电：渝电：史蒂威尔军在华司令部八日早晨第三十二号战报述□美国轰炸机就在战斗机拥护之下，进袭白云山敌机场区沙□日本建设物，码头，仓库，日方设施受重创，场上有飞机若干架被美机投弹击毁后，与日方战斗机九架追击，□□击毁新式之九七机一架，□□□□□击落零式战斗机一架，□□□察击中日方战斗机一架，该机或已因而焚毁亦尽可能。（□は判読不明の文字。以下同じ）

➡ 8 月 6 日には、日本軍占領下の広州天河飛行場を、8 月 8 日には広州白雲山飛行場を空襲した。いずれも、爆撃機と戦闘機の編成による出撃。

■ 1942/08/19「盟军神鹰继续获胜」

新华社延安十五日电：……盟国神鹰继续获胜，在上月盟机神鹰数度出动，获得重大战果，近半月来，盟国空军益发大头身手。第一，衡阳数度空战，大破寇机，敌寇被盟机数度严重轰炸，遭受空前损失后，企图报复，首先企图摧残盟国衡阳空军根据地，来铲除盟国空袭的威胁。上月三十日以来，寇机一百一十五架前后曾五处进袭，盟机于数度空战中大搞神威，计击落日机六十七架，击毁四架，占来犯敌机半数以上。第二，盟国神鹰队保卫我国空军根据地以及配合临川我军反攻外，并再度出动击袭广州・汉口・南昌・岳阳等地，亦均获胜利。

➡「神鷹」はアメリカ軍主力戦闘機のホーク（hawk）を指していた。7 月 30 日以来日本軍戦闘機 115 機が 5 回、湖南省衡陽のアメリカ軍第 10 航空隊基地を攻撃した。衡陽基地の防衛をめぐって空中戦が展開された。

■ 1942/08/19「盟机空袭岳阳」

新华社延安十四日电：渝讯：史蒂威尔司令部发表第三十六号公报称：八月十一日，美战斗机轰炸岳阳，在市区投落高度爆炸弹及烧夷弹，此次出袭极为得手，美机全数返防。

➡「アメリカ軍戦闘機」による岳陽市街地にたいする無差別爆撃だった。

■ 1942/08/31「沙市敌懼空袭」

［湖北省西南部］恩施二十四日电 : 沙市方面之敌 , 鉴于飞来盟机兹次击炸武汉 , 恐慌万分 , 连日忙于改良防空洞设备 , 防我空袭。

➡恩施は国民政府の空軍基地があった湖北省西南部の地方都市で、ここから同省南部長江北岸の沙市を空襲した。恩施は、1943 年 11 月以降中国アメリカ空軍混合団駐屯基地の一つになった。

■ 1942/09/09「盟机出击赣北 , 威力封锁敌水陆交通」

新华社延安五日电 : 中央社讯 : 史迪威（按即斯蒂威尔改称）将军司令部发表第四十一号公报称 : 九月一日 , 美机一队飞袭饒州（波阳）西南十哩波阳湖中装运日兵及供应品之大汽船及小船二十五艘 , 日军死伤惨重 , 且有船多艘起火。同时 , 我战斗机另有一队飞袭某地 , 日本汽轮七艘当已沉没 , 拖船亦受创。未修之火车站及仓库亦遭我袭击 , 有仓库起火焚烧。其后又有我机一队袭击吴城附近之摩托船以及口口之大汽船四艘 , 摩托船当击沉十余只 , 大汽船数艘亦受创。另一队美机 , 于铁路上袭击日军用车一列 , 上装有陆军大炮及马匹 , 火车头当即被毁 , 物资亦受很大损失。当日下午美轰炸机轰炸南昌城西北之日军集居区域 , 落弹多支 , 日军司令部一处 , 大仓库一处均直接中弹 , 在此次出动中 , 美机有一架失踪。

➡ 9 月 1 日、江西省東北部の波陽湖畔の饒州に停泊する日本の軍船や商船に大規模な空爆を実施した。同日、江西省南昌西北の日本軍駐屯地も空襲。

第 3 節　在華アメリカ陸軍第 14 航空隊時代（1943 年 3 月～ 1945 年 8 月）の中国国内空襲

(1) 在華アメリカ陸軍第 14 航空隊と中国アメリカ空軍混合団の時代

「アメリカ空軍駐華特遣隊」は、1943 年 3 月 10 日、アメリカ陸軍第 14 航空隊に改編された。シェンノートが司令官に任じられた。直前の 3 月 3 日、シェンノートは准将から少将に昇任した。第 10 航空隊から独立し、アメリカ陸軍航空隊司令官ヘンリー・アーノルドに隷属することになったから、ビセルとの対立からは解放された。特遣隊は第 14 航空隊として発足するまでの 9 か月間に日本軍機 149 機を撃墜し、爆弾 300 トン余を投擲した。特遣隊の損害は P40 戦闘機 16 機だった。

第 14 航空隊の司令部は昆明、前線司令部は桂林に置かれた。発足当初は搭乗員・地上兵員合計 2000 人、軍機 285 機に過ぎなかったが、のちに装備が増強されて、1944 年 11 月には、搭乗員・地上兵員合計 1 万 7437 人、戦闘機 535 機、爆撃機 156 機を擁した。また、1943 年 3 月から 1945 年 5 月までに日本軍機 2054 機を撃墜・破壊し、第 14 航空隊の損害は 500 機に達した【11】。

第 14 航空隊は、日本軍占領下の中国の大中都市において「戦略爆撃」を実行したように思われる。1943 年 3 月に第 14 航空隊司令官に任じられたシェンノートの提起した空襲戦略については、次のような分析がある。すなわち、「シェンノートは 3 つの段階を取ることを提案した。第 1 段階は 1943 年 7 月 1 日から 8 月 31 日までで、戦闘機 1 編成と中型爆撃機 1 編成とを桂林～衡陽地区に移動させて広東で対日空軍作戦を実行し、台湾海峡と長江を航行する日本船舶を攻撃する。さらには、日本本土の基地と工業拠点を攻撃し、中国沿岸の日本船舶や日本から台湾や海南島、上海への航路

の船舶を攻撃する。第2段階は1943年9月1日から10月31日までで、北の山海関から東の南京・上海・台湾までの日本の攻撃目標を攻撃する。第3段階は11月10日以降で、空襲作戦を朝鮮半島沿岸からベトナムのカムラン湾および日本本土の工業目標の攻撃、さらには東京まで攻撃を拡張するというものであった」【12】。中国の日本軍占領地でも、広東省や南京・上海・海南島などは重要な占領拠点であり、高射砲による地上からの反撃は避けられなかったから、軍事目標に限定する空襲は困難だったのではないか。これらの地域の工業拠点や港湾施設を攻撃するためにも空襲は都市全体にたいする無差別爆撃になったのではないか、と思う。具体例をあげると、1944年12月18日、第14航空隊は成都のB29基地からB29編隊による漢口空襲を実行し、大成功を収めた。シェンノートとカーチス・ルメイの共同提案による焼夷弾主体の空襲だった。後の日本本土都市空襲の予行演習となったのである【13】。

中国空軍は1942年以降北インドでアメリカ軍の訓練を受け、帰国にさいしてはP40、P43、P66などの新型戦闘機を持ち帰った。1943年6月、シェンノートは両国の軍事指導者に混成団の結成を提案した。シェンノートの提案をうけて、1943年11月5日、「中国アメリカ空軍混合団（China American Combined Wing/CACW）」が桂林に設立され、桂林には指揮所が置かれた【14】。「混成団」については第5節で後述する。

本節（2）では、第14航空隊の空襲記事を紹介するが、日本軍の「一号作戦」以前の第14航空隊による空襲作戦をみると、香港九龍（1943/7/28～29）、漢口（1043/8/21、24）、香港九龍（1943/8/25）、広州機場［飛行場］（1943/8/26）、越南ハノイ（1943/8/31）、岳陽（1943/8/31、9/1）、広州機場（1943/9/4）、九江（1943/9/上旬）、大冶（1943/9/12）、九江（1943/9/14）、南昌（1943/9/15）などが空襲目標になった。こうした第14航空隊の空襲作戦によって、中国東南部の制空権はしだいにアメリカ軍に移っていった。こうした戦況変化によって日本軍は、中国大陸のアメリカ軍飛行場の覆滅と、南方圏への海上交通手段に代わって、本土―朝鮮―満州―中国大陸を南北に縦断し、広東省やベトナムを通って南方圏との陸上交通を確保することを目的として、「一号作戦」（大陸打通作戦）を計画実行した【15】。

日本軍は、1944年4月、河南省開封から京漢鉄道沿線を南下した。当初の作戦展開は河南省では順調で、国民政府軍の地上部隊の抵抗はほとんどなかった。黄河を決壊させて敗走した国民政府軍にたいして、民衆は非協力的だったからだった。アメリカ軍と日本軍との激戦は湖南省で展開された。1944年5月初め、シェンノートは、「中国アメリカ空軍混合団」を黄河流域に派遣し、日本軍の侵攻を阻止しようとした。1944年6月18日、日本軍、湖南省長沙を占領した。7月、第14航空隊の前線基地が置かれた湖南省衡陽の攻防をめぐる空戦が展開された。8月8日、日本軍は衡陽を占領し、その後桂林に侵攻した。

（2）在華アメリカ陸軍第14航空隊による中国国内空襲

■ 1943/08/10「美机轰炸香港九龙」

新华社延安一日电：据史蒂威将军驻华司令部发表之第八九号公报称：「美驻华空军第十四航空队，

七月二十八及二十九日 , 连续轰炸□ , 重要目标为香港日方船只及码头…」（以下、14 行判読困難）

➡ 1943 年 3 月 10 日に設立されたアメリカ陸軍第 14 航空隊（司令官、シェンノート）による空襲作戦のニュース。7 月 28 ～ 29 日、同航空隊が香港の九龍地区日本軍港湾を空襲した。この記事は第 14 航空隊の作戦を『太岳日報』が最初に伝えたもので、以後の空襲記事には概ね第 14 航空隊の言及がある。

■ 1943/09/07「美机连炸广州汉口」

延安电 : 史蒂威将军驻华总部发表公报称 : 八月二十一日美驻华空军第十四航空队在汉口区之攻势轰炸中 , 击毁敌机八十五架以上 , 另有零式机十一架或已破毁。我机轰炸甚为得手 , 所有炸弹均落汉口码头及堆栈区之军事目标 , 引起大火多处。继袭汉口机场 , 毁敌机多架。二十四日美机袭击武汉 , 击落敌机十九架 , 予敌机场以重大摧毁。

另讯 : 二十五日美机炸毁香港九龙船坞区敌船泊约二万五千吨 , 炸弹直接命中五百五十呎长敌轮两艘使之着火。另有敌小型运输轮一艘亦着火。又二十六日晨 , 美机轰炸广州 , 与敌机空战 , 击落敌机十架。

➡ 8 月 21 日、第 14 航空隊、漢口飛行場を急襲して、駐機中の日本軍機 96 機以上を破壊。同日、漢口埠頭も空爆した。8 月 24 日には、再度漢口飛行場を空爆した。8 月 25 日には、香港九龍の埠頭に停泊する大型日本船を空爆、8 月 26 日には広州に出撃して空中戦を展開した。

■ 1943/09/10「美驻华空军 , 活跃华南上空 , 更番炸敌水陆交通」

延安四日电 : 上月三十一日 , 美驻华空军第十四航空队袭击越南及中国沦陷区内散处各地的敌方目标 ,B 二四式轰炸机以重弹轰炸河内附近的基伦机场 , 多处起火。密辙尔式轰炸机袭宜昌敌方新机场 , 其建筑物多处及路道均受损失。四零式机［P-40 轰炸机］在香港海外基地附近俯冲轰炸四五〇呎之轮船一艘 , 该轮直接中弹一枚 , 并扫射七五呎之轮船一艘 , 其汽锅中弹爆炸 , 该二艘均在沉没中。美机在汉口以南粤汉路沿线袭击临时发现目标时 , 击毁敌机车二辆 , 并俯冲轰炸岳阳车站车场。又据军息 : 一日午后 , 美机袭击岳阳湖面敌舰与岸上密集部队。

➡ 8 月 31 日、第 14 航空隊の爆撃機、越南ハノイ近郊の基倫飛行場を空爆。同日、湖北省宜昌に日本軍が新たに建設した飛行場を空爆した。9 月 1 日、湖南省の洞庭湖岸の岳陽に停泊する日本軍船と日本軍部隊を空襲。

■ 1943/09/13「盟机轰炸缅境 , 毁敌船百三十艘」

延安六日电 : 新德里讯 : 美第十航空队公报称 : 盟机四日袭击仰光敌船及港湾设备。昨晨盟机继续袭击缅境沿边各地 , 击毁敌大小船只一百三十艘。

渝讯 : 史迪威总部公报称 : 九月三五两日 , 美第十四航空队俯冲轰炸扫射老街东南地区的敌军事设备 , 该地仓库及兵营区域发生大火多起。九月四日袭击广州附近天河机场。

➡記事の前半はニューデリーの連合国司令部経由で延安に伝えられた第 10 航空隊による 9 月 3、5 日の中越国境の老街東南の日本軍設備への空襲報道。9 月 4 日の広州市天河飛行場への空襲は、第 14 航空隊の作戦で、スティルウェル司令部の公報が重慶から伝えられた。

■ 1943/09/28「盟机勇猛作战 , 炸毁敌艦三十艘 , 塌石灰窑铁矿」

（延安二十二日电）据悉：这几天来，盟机在湖北・鄂南・赣北许多地方都很活跃，战果辉煌。本月上旬在阳新境内江面，炸沉敌军舰一艘，重伤舰船三十几艘。炸后不能行驶顺水下流的四十三艘，毙伤敌海军在两千名以上。此外，盟机又在九江附近炸毁敌大车头两个。十二日盟机击大冶阳新敌军事目标，直接命中多处，敌伤亡很大。石灰窑敌铁矿公司也同时被炸毁。十四日盟机一批飞大冶扫射，敌营房当时就有一间起火焚烧，又扫射敌运兵列车。在阳新扫射敌军营房时给了它重大损失。同日盟机二十一架往九江，击炸敌运输舰二艘，一艘沉没，另一艘局部冒烟。盟机十五日飞炸南昌，敌机场和油弹库，结果还不清楚。

➡ 1943 年 9 月上旬、湖北・安徽南部・江西北部の長江流域の日本軍艦船への空襲。9 月 12 日、湖北の大冶・陽新の日本軍と製鉄工場、9 月 14 日、大冶の日本軍兵舎、兵員輸送列車への空襲。9 月 14 日、江西省九江の日本軍艦船、9 月 15 日、江西省南昌の飛行場など空襲。

■ 1944/07/10「争夺衡阳战斗未已」

（新华社延安七日电）敌从西，北，南三面向衡阳猛攻，四日仍在进行中，其中以西面长衡公路终点火车西站迄江边铁道南侧为最激烈。由湘乡西犯敌，三日侵入永丰，湘江以东敌，侵至莱阳，肥江，小水铺一线（莱阳南二十里）。粤北一线敌，三日陷龙门。

盟机终日出动，协助地面部队作战。五日盟机曾飞往衡阳及永丰扫射敌军，二日盟机飞粤北助战时，曾在军田上空击落敌机四架。

（又据中央社成都四日电）敌侦察机两架，四日七时四十分由鄂西飞，其中一架被中美混合机队之躯逐机击落。

➡ 7 月上旬、日本軍の「一号作戦」の一環で第 14 航空隊の前線基地のある蒲南昌衡陽をめぐる攻防戦。アメリカ軍機は地上部隊と協力して抗戦。

■ 1944/07/16「寇蹄侵入衡阳市内，敌机五架侦察陕南」

（新华社延安十日电）衡阳市街之战仍在继续中。六日晚敌机飞衡阳市区轰炸，投燃烧弹甚多。盟机亦日夜出动阻敌。六日・七日・八日连续出动。七日晚八时起至八日晨五时止，盟机分批轰炸长沙・永丰等地，总计两日间，炸伤日军一千五百名，马五百匹。又盟机四日・五日在海南岛附近炸沉敌一千两百吨货轮一艘。七日上午敌机五架窜陕，在陕南西乡紫阳等地视察后逸去。

➡ 7 月 6 ～ 8 日、衡陽をめぐる攻防戦。連合国軍機は長沙・永豊を空爆したが、日本軍は 8 月にはついに衡陽を占領することになる。

■ 1945/01/07「盟机炸济南」

（新华社延安二十九日电）据美新闻处蓉分处讯：十四航空队，战斗机队贾德勒队二十六日再度出击济南机场，炸毁地面敌机二十架，战斗机九架，连同二十四日炸济南时所毁三十八架，则日寇三日间在济南损失飞机达六十七架。

➡アメリカ軍新聞処成都分処の発表で、第 14 航空隊は 1944 年 12 月 24 ～ 26 日に山東省済南飛行場を空爆し、3 日間で日本軍機 67 機を破壊した。

■ 1945/01/09「美机五百架，猛烈轰炸台湾」

（新华社延安五日电）据东京广播称：实力强大的美特种舰队于三日清晨逼近台湾琉球海面，以五百

架飞机袭击台湾各地与琉球群岛的冲绳岛。美机系以舰载机为主，有自陆地起飞的超级空中堡垒四十架策应，主力袭击台湾全岛，而以舰载机五十架袭冲绳岛，空袭自晨七时四十分起至下午二时三十分方止。四日上午八时，美机四百架复分批袭击台湾各地及冲绳岛，为时达六小时以上。美特种舰队于空袭，即游弋于台湾近海。广播谓：美方壮举乃欲加速解决菲岛战事。并谓：与空袭台湾同时，菲律宾方面美军已将运输队投入苏禄海，有新登陆意图。

➡これは 1945 年 1 月 3 ～ 4 日の台湾・沖縄本島への空爆作戦で、空母を利用した戦闘機 500 機と陸上の基地（サイパン島 ?）からの B29 爆撃機 40 機による空爆。主たる攻撃対象は台湾だった。

■ 1945/01/27「美机广泛出击，同蒲平汉线均被炸」

（新华社延安十八日电）与美航舰飞机对华南海岸的袭击同时，在华美空军对日寇展开配合攻势。十七日中国战区美军司令部宣布：十四航空队飞机十五日曾袭香港・广州及厦门，毁创敌船多艘，并在长江区毁创敌船九艘，内军舰一艘。十六日美机泛袭华北华中与华南日寇交通线，曾炸黄河铁桥，并沿同蒲及平汉各铁路线，毁创火车二十九辆。又据敌广播称：在华美空军战斗机轰炸机联合编队约九十架，十四日下午曾猛炸武汉地区。

➡ 1 月 15 日、第 14 航空隊、香港･広州･アモイを空襲。1 月 14 日、武漢地区を空爆。1 月 16 日、同蒲鉄道・平漢鉄道沿線、黄河鉄道橋を空襲した。

■ 1945/02/01「盟机连续出击，奇袭北平机场，洛阳新乡均被炸」

（新华社延安二十七日电）据中国战区美军空军司令部二十六日发表公报称：十四航空队北方基地的五一式机，二十五日奇袭北平机场，击毁敌机四十架，其中战斗机五架，在空中被毁六架，可能被毁二架。我战斗机于归途中，击毁铁路机车四辆，击创一辆。第十四航空队，在本月中共击毁敌机三百零五架。中美混合机队的战斗机，二十六日晨袭石家庄及陇海路开封一带的铁路车站，蚌埠路铁路修理厂及平汉路驻马墓閭铁路车站，共毁机车四十二辆，并击毁石家庄机场中敌机两架，我战斗机复遍袭各铁路目标，毁敌机车共三十一辆，击伤三辆。二十四日出击铜山・洛阳・新乡以北的平汉铁路，沿线击毁敌机车一十一辆。两日来总计击毁敌机车六十七两，此役我机三架未返。

➡ 1 月 25 日、第 14 航空隊、北平飛行場を奇襲攻撃し、日本軍機 40 機を破壊した。1 月 26 日、「中国アメリカ空軍混合団」、石家荘および隴海鉄道の開封一帯の駅舎、蚌埠鉄道の修理工場、平漢鉄道の駐馬店駅舎などを空襲し、鉄道車両 42 両を破壊。1 月 24 日、銅山・洛陽・新郷以北の平漢鉄道を空襲し、鉄道車両 11 両を破壊。1 月 24、26 日の空襲で日本軍車両 67 両を破壊した。

■ 1945/02/13「盟机袭击，北平济南」

（新华社延安九日电）据中国战区美军司令部宣布：第十四航空队基地的「q」二十九式机，六日空袭北平机场，击毁敌机七架，击创七架，另可能击毁两架：此外复击毁敌火车头七辆。七日美战斗机，在济南以北以南各地毁敌火车头八辆，并在济南机场上空击毁敌战斗机及轰炸机各一架。

➡第 14 航空隊、2 月 6 日、北平飛行場を空襲、日本軍機 7 機を破壊。2 月 7 日、山東省済南以北以南の鉄道沿線と済南飛行場を空襲。

第 4 節　『太岳日報』の報道する 1944 年 5 月～ 12 月の中国国内空襲

本節では、中共の解放日報社の社論「半年来の連合国軍機による敵後方の活動（半年来盟机在敌后的活动）」（太岳日報 1944 年 12 月 27 日）を分析する。内容は、1944 年後半の半年間の連合国軍機による空襲である。「連合国軍機」と書いていたが、具体的にはアメリカ陸軍第 14 航空隊機である。冒頭の段落では、詳細に空襲の「成果」を列挙していた。すなわち、

「1944 年 5 月 30 日の連合国軍機による北平の石景山鉄鉱空襲以来、連合国軍機は敵上空で活躍している。華北・華中・華南の敵後方大都市にある飛行場・工場・鉱山・兵営・鉄道・駅舎などが空爆された。本報が集めた不完全な材料による統計でも、空襲された都市には華北の北平・済南・太原・開封・鄭州・大同・長治・新郷・徳州・連雲港・安陽・石家荘など、華中の上海・南京・浦口・安慶・蕪湖・武漢など、華南の広州・香港・九龍などがある。空襲された鉄道駅舎には、平漢鉄道の邯鄲・高邑・内邱など、正太鉄道の正定・邢台・娘子関・井陘・陽泉など、同蒲鉄道の運城・臨汾・洪洞・趙城・霊石・霍県・平遥・介休など、津浦鉄道の泰安・大汶口・東社など、徳石鉄道の杜賢荘・良村など、隴海鉄道の白塔寺などがある。空襲された工場・鉱山には、太原兵工廠・太原製鋼廠・焦作の李 × 村炭鉱・石景山鉄鉱・張荘炭鉱・宮里炭鉱があり、上海・武漢など大都市部の工場・造船所・発電所などがある。連合国軍機の毎回の出動は 1 機から 30 機の規模だった。アメリカ陸軍第 14 航空隊のランドル准将によれば、10 月と 11 月の 2 か月間に連合国軍機の出動回数は 600 回に及んだが、これは抗戦 8 年間で未曽有の出来事だった」。こうした活発な連合国軍機による空襲の背後には、すでに中国の戦場における制空権が連合国側に移っていたという現実があった。

空襲の性格については、「これらの空襲は当面はまだゲリラ的性格の空襲であって戦略的な空襲ではない」とするが、「敵の損失はきわめて重大」であるとして、「これは、敵後の軍民が数年間奮闘してきたなかで連合国から初めて勝ち得た実際の援助である」と位置付けていた。連合国軍機の空襲が「敵後方の軍民による政治攻勢と結びつけて行なわれた」とし、それが日本軍にたいする精神的な打撃をさらに重大化させた」という。

社論では、日本軍が被った衝撃を新民会冀寧道総会の石井忠夫の書簡を引きながら述べていた。すなわち、「連日我が軍の航空基地の格納庫が空襲を受けており、これは敵側による反攻の企図を示すものである。北平空襲は東京空襲の第一歩であろう。堅強を誇るアメリカ海軍による太平洋上の反攻と中国大陸における空襲とは、日本軍治安区の政治経済社会機構を崩壊せしめ、貨幣流通を劣悪な状態におとしめるであろう。そこで、今では多くの者が現金を貨物に換えて保存し、買い占め売り惜しみする現象が発生している」。こうして、「皇軍は不敗の体制を確立した」という宣伝は完全に粉砕された、と社論は主張した。そして、「こうしたゲリラ的な空襲は敵にたいしてかくも大きな打撃を与えたが、将来戦略的空襲が行われるときには、敵にたいする打撃は今日の十倍百倍になるだろう」とした。

連合国軍機による空襲にたいする中国民衆の反応についても書いていた。空襲が発生して、「我が同胞のなかには解放区に移動する者もあった。武漢空襲ののち、1000 人に上る民衆が解放区に移動した。連合国軍機の空襲をみて、拍手快哉を叫んだ者もいた。社論は日本海軍の松島報道部長談話を引いていた。すなわち、「（連合国軍機の空襲時の）一般市民の行動をみると、立ち止まって鶴首して見上げたり、高い場所から見晴るかしたりしており、まことに遺憾である」という嘆きだった。また、1944 年 10 月 12 日の上海の親日系新聞『新中国報』の記事も引いて、「英国やアメリカ機の来襲は、上海市民を大いに力づけており、民衆のアメリカ機にたいする幻想はいっそう大きくなった」という。

社論の後段には、連合国の戦友に対する敵後方の軍民の支援について記していた。これは、戦場で不時着した連合国軍機の搭乗員にたいする中国人の救助活動である。次のように書いていた。「我われが知る限りでは、今年だけで我われが救助した連合国軍機の搭乗員は、釋賽伏刚少佐・奥勃朗大尉・莱佛格大尉・斯太尔□克中尉・柏纳德中尉・勃茨中尉・葛莱格代理队长・白福利欧中尉・勃朗台治少尉・孔理曹長・希克軍曹・厄尔慈三曹など 35 人である。鹽阜区（湖南省湘潭県）の軍民は、敵占領区に不時着した B29 を救出するために、雨の中を一昼夜死守し、B29 を回収にやって来た日本兵 100 余人に反撃した。機体を死守した中国側の兵士のうち 3 人が戦死し、1 人が負傷した。彼らの行動によって、5 人の搭乗員が救出された。また、柏纳德と葛莱格の二人は敵占領区から救出され、秘密裏に新四軍に送り届けられた」（欧文姓名が不詳なため中国語表記のまま引用）。もっとも、アメリカ人搭乗員の救出はたんなる美談ではなかったようである。救出を成功させるためには、「日本軍よりも高い褒賞金を協力者に支払う」必要があり、そのために、シェンノートは「時として資金不足におちいって、中国軍の将軍に借金を申し込む事態」になったという【16】。

日本占領地域にたいする空襲は、「連合国軍による敵後軍民にたいする空中援助」であるから、「連合国の戦友を援助することは当然の責務であると敵後軍民は認識している」。そして、「連合国がさらに多くの航空機を派遣して敵後方の空襲をしてくれること、敵後方の軍民にさらに実際的さらに直接的な援助をしてくれることを希望する」ということばで社論を結んでいる。

社論はその中段において、空襲の性格について「これらの空襲は当面はまだゲリラ的性格の空襲であって戦略的な空襲ではない」と規定していた。さらに、「こうしたゲリラ的な空襲は敵にたいしてかくも大きな打撃を与えたが、将来戦略的空襲が行われるときには、敵にたいする打撃は今日の十倍百倍になるだろう」と分析していた。この点について若干議論しておく。「ゲリラ的な空襲」とは、日本軍や傀儡軍の軍事目標に限定した空襲を指していたと考えられる。「戦略的な空襲ではない」というのは、日本軍後方にたいする人口密集地やあらゆる政治経済機関にたいする無差別爆撃ではないという意味であろう。戦略爆撃史については、前田哲男（2006）『戦略爆撃の思想』凱風社、を始めとする多くの考察があるからここでは触れない。それを過不足なく定義するならば、「大規模の空中攻撃力を集中させ、交戦国の政治・軍事・工業と交通中枢にたいして『無差別』で大規模の連続爆撃を行い、交戦国の戦争指導と戦争を支える政治中枢と工業、交通能力を消滅すると同時に、大量の民間人を死に至らせ、物質と精神の両面から交戦国が戦争を継続する基盤を喪失

させる」【17】作戦だったと言ってよい。アメリカ軍は、第5節でみるように山西省東南部ではおおむね軍事目標に限定した「ゲリラ的な空襲」を実行したように思われる。

第5節 「連合国軍機」による太岳軍区内日本軍にたいするゲリラ的空襲

(1)「連合国軍機」による空襲

当初は日本軍機による太岳地区への空襲が実行された。それは、以下の2点の記事から確認できる。すなわち、「昨日敌机袭沁源城」(1940/10/18)、「寇机狂炸沁源城」(1941/05/30)、である。その後3年間ほどは太岳地区にたいする日本軍機の空襲もアメリカ軍機の空襲も確認できない。この期間は中共系の八路軍による根拠地建設が進み、日本軍や傀儡軍を取り巻くようにゲリラ戦術が展開されたから、日本軍によるピンポイントの空襲戦術は困難であった。

その後の「盟機(連合国軍機)」による空襲は1944年5月以降であった。この時期は「一号作戦」が着手された時期に重なっていたが、太岳地区への空襲は「一号作戦」の陽動作戦というよりも、中共系八路軍のゲリラ戦争を支援するための「ゲリラ的空襲」だったと考えられる。これらの空襲は、太岳地区の戦線が膠着し、日本軍の動静が八路軍勢力に筒抜けになってから展開された。南同蒲鉄道とその沿線の駅舎、とくに臨汾駅が主要な「ゲリラ的空襲」の目標だった。これらの空襲記事は第2節、第3節と異なり、在華アメリカ空軍司令部公報を情報源にしたものではなかった。「本報訊」または太岳区内の特定地区から発出された記事だった。空襲の主体は「連合国軍機」で、アメリカ軍機とは書かれてはいない。筆者は、空襲の主体は1943年11月5日に結成された「中国アメリカ空軍混合団」のうちの中国軍機だった、と推測する。

混成団の作戦方針は、「中国の地上部隊の作戦に協力し、中国大陸における日本軍の力を削ぎ、在華日本空軍を打撃して空中戦で優位にたつ」ことだった。混合団は、司令・大隊長・中隊長はアメリカ軍人が、副司令・副大隊長・副中隊長は中国軍人が任じられた。第1大隊(爆撃機)は1・2・3・4中隊、第3大隊(戦闘機)は7・8・28・32中隊、第5大隊(戦闘機)は17・26・27・29中隊から構成されていた。通常1戦闘機中隊はアメリカ人搭乗員9人、中国人搭乗員20人から構成され、地上勤務員にはアメリカ人20人、中国人150人が配置された。つまり、搭乗員や地上勤務員の主体は中国人だった【18】。混合団の司令部は重慶市の白市驛に置かれ、アメリカ空軍所属の大隊は桂林(広西)・赣州(江西)・遂川(江西)など、中国空軍所属の大隊は梁山(四川)・漢中(陝西)・老河口(湖北)・恩施(湖北)・芷江(湖南)などに置かれた【19】。

毎回の空襲に参加した軍機も少数で、ピンポイントで空襲したら即座に姿を隠した。「連合国軍機」がどこから飛び立ったのかは明示されていなかった。山西省東南部に比較的近かったのは、老河口・恩施・梁山・漢中などの中国軍基地だった。既述の「一号作戦」によって、国民政府の担当する「正面戦場」の地上軍は敗走し、中国東部のアメリカ・中国軍基地は日本軍に占領されたり破壊されたりした。しかし、すでに制空権はアメリカ・中国軍側に移っていた。アメリカは1944年6月、マリアナ諸島を奪取してサイパン島のB29爆撃機の基地建設に着手し、11月には同基地か

ら日本本土への戦略爆撃を始めた。在華アメリカ空軍基地の爆撃拠点としての価値は軽くなっていた。だから、規模の小さなゲリラ的空襲の任務は中国空軍に任されたのではないか、と思われる。

(2) 太岳軍区内日本軍にたいするゲリラ的空襲

■ 1944/06/13「我机炸洪洞，敌人死了十名」

（洪洞讯）五月三十日上午十二时，我机两架，由同蒲铁路北上，飞到洪洞，恰遇玉峯山敌人在外打野操，敌人以为是日本飞机，急忙拿旗联络，我机即扫射，打死敌九名。这时，敌车一列开到车站，又遭轰炸，炸毁敌车头一个，打死敌司机两名，敌兵三名。（星学・旭・庸在）

➡「我機 2 機」は中国軍機を指していた。同蒲鉄道沿線の洪洞の日本軍駐屯地と洪洞駅舎にたいする空襲だった。

■ 1944/08/28「盟机再炸临汾，敌司令部门口中弹」

（本报讯）本月六日上午十时，盟机四架，飞炸临汾城，投弹十余枚，弹落敌中代旅团司令部门口，炸伤日卫兵两名，引起敌人极大恐慌。第二天敌司令部即移驻城外。现浮山敌亦急急挖沟挖洞，准备防空。（王至诚）

（另讯）七月二十九日盟机炸临汾时，敌机十三架在飞机场上被炸，毁并炸坏两个火车头，城内外敌新旧营房均中弹数十颗。（成城）

➡ 8 月 28 日は「連合国軍機 4 機」による臨汾県城内の日本軍司令部にたいするピンポイント空襲だった。また、7 月 29 日にも「連合国軍機」が臨汾の日本軍飛行場を空襲した。

■ 1944/12/19「盟机轰炸同蒲沿线，毁敌火车头十七个」

（临汾讯）近来盟机不断轰炸同蒲沿线。据临汾消息，本月一日有两架盟机在临汾车站□赶敌两个火车头，用机枪连续扫射，把锅炉打毁。三日盟机一架散发传单，四日盟机八架在临汾车站轰炸十五分钟，投弹二十多枚，敌三个防空洞就炸塌两座。一个防空洞中挖出敌兵伪员死尸各二十多具。另一个防空洞溃没挖开，据说其中也死了四五十人。又炸毁车站西北的农业棉花实验厂房子四五十间。据说盟机最近在同蒲沿线已炸毁敌人十七个火车头，半数被打坏，修理很是困难。又因同蒲路车轨窄狭，其他列车不能通行，加之司机不断逃跑，敌人交通受到很大的影响。（成城・旭峯・王雨・育第）

➡ 12 月 1 日は「連合国軍機 2 機」による臨汾駅舎空襲、12 月 3 日は 1 機によるビラの撒布、12 月 4 日は 8 機による臨汾駅舎空襲や駅舎西北の農業棉花実験工場への空襲だった。

■ 1945/02/27「盟机连炸同蒲线，又毁火车头七个」

（本报讯）一月十八至二十七日，盟机连袭同蒲线六次。在平遥车站炸坏敌火车头两个，炸伤日兵三人，伪军一人。在介休张兰镇车站，炸坏火车头两个。平遥洪善村车站，炸坏火车头一个。祁县炸坏车站票房一间。一月二十三日，赵城车站附近，盟机用机枪扫射，击毁敌火车头一个。二十七日，盟机四架飞袭临汾，炸毁火车头一个，敌守备部队伤亡十余人。炸贾庄亦死伤敌十余人。

➡ 1 月 18 日～ 1 月 27 日にかけては同蒲鉄道沿線にたいして 6 回空襲した。平遥駅舎、介休県張蘭鎮駅舎、平遥県洪善村駅舎、祁県駅舎、趙城駅舎などを空襲し、停車していた機関車を破壊した。

■ 1945/03/05「盟机猛烈轰炸临汾，敌伪死伤二百余人」

（临汾讯）二月十六日上午十时，盟机轰炸机九架，战斗机十架，猛烈轰炸临汾。轰炸时间约半小时，投下重炸弹一百多个。在火车站，投下炸弹四个，炸毁火车头一个，藏火车头的房子三间，储水塔一座。正轰炸车站时，五个骑马的敌人从新营盘内跑出来，盟机即向这几个骑马的敌人一连串的投下十几个炸弹，敌人连马片刻变为肉泥，据说其中有敌将官一名。这时有敌兵百余名带领苦力五百余正在车站东边，北营盘至南营盘之间挖防空洞。当盟机袭旋时，苦力即四散逃走，只有敌人就地隐避，为盟机发觉，投下很多炸弹，炸死敌人六十二名，伤三十四名，苦力无甚损失。南北营盘大部被炸毁，敌人死伤四十余人。火车站东北贾庄村伪警务段住的房子十余间，全部被炸毁，藏在里边的车站伪工作人员及工人三十余人全被炸死。火车站东南康庄堡宋云龙住宅十余间房子全部炸毁。藏在住宅内的伪工作人员三十余亦全被炸死。总计此次敌人死伤一百五十余人，伪军人员死伤七十余人。

现临汾城在盟机不断轰炸了。因机车损失过多，且司机纷纷逃亡，以致交通不便，货物缺乏，兼之伪币暴跌，城内商号纷纷倒闭，老百姓亦不断逃出。（成城・凤池・高俊・贺挽弓）

➡ 2 月 26 日の空襲は爆撃機 9 機、戦闘機 10 機による臨汾駅舎を目標とする空襲だった。駅舎周辺や駅舎東北の鉄道愛護村警備区住宅を空襲した。駅舎東方に中国人苦力 500 人を 100 人の日本兵が帯同していたのを発見して空襲した。苦力は全員無事で、日本兵は 62 人爆死、34 人負傷したと報道したが、少々出来すぎた成果に思われる。空襲によって、臨汾県城内は貨物欠乏、通貨暴落となり、商店の倒産が相次いで庶民は町から逃げ出したという。すべて「連合国軍機」による。

■ 1945/04/23「盟机配合我军攻势，连炸白晋同蒲沿线」

（本报讯）盟机配合我军春季攻势，连袭我区周围敌据点及交通线，现综合各地通讯员报导如下：四月上半月，盟机连袭高平境内白晋路，仅五龙庙至赵庄一段，即被炸了四次，共炸毁敌汽车三辆，炸死日兵二十余，伪军一百多，牲口三百余头。三日，盟机回返，路径长子城南高庙，投弹四枚，炸伤日军三名。十日，曾陵川・阳城敌伪千余向北退窜时，更被盟机炸得乱七八糟，伤亡很大。十一日，盟机五架扫射路径王屋镇的敌山砲队，伤敌两名，马一匹。在同蒲线上，五日，盟机四架在洪洞城南铁桥投弹二十余枚，炸毁桥垛一个，桥眼□空。八日，盟机四架投弹四颗，炸坏桥北砲楼一座。桥南砲楼砲击盟机，目标暴露，又遭投弹十余枚，炸毁防空洞一个，闷死敌人七名。同日霍县敌正在上操，被盟机扫射，惊得乱跑，二十几个鬼子在炸弹下送命。九日，赵城敌水田公司顾问三浦及工程头汉奸赵志鸿被炸身死。十日，盟机四架炸毁赵城永乐砲楼一座。砲顶炸到底，砲楼毁了花，守敌二十余名都毙命，又在磨头车站，炸中敌汽油一车皮，毙敌三名，洋马五匹。明姜镇敌火车隐蔽工事亦被炸毁，炸坏车皮十四个，敌伪死伤不详。（李树荣・王秀亭・拜槑・肇基・骏英・春庵・裕民・涛・华峯・王廉他）

➡ 4 月上旬、山西省東南部の白晋鉄道の高平県内を 4 回空襲し、トラック 3 台を破壊し、日本兵 20 余人を、かいらい軍兵士 100 余人を死傷。4 月 10 日には陵川・陽城から移動中の日本軍・かいらい軍 1000 余人を空襲。4 月 5 日には南同蒲鉄道の洪洞城南の鉄道橋を空襲破壊した。4 月 8 日には、洪洞鉄道橋の南北にある砲楼を空襲。同日、霍県駐屯の日本兵が野外教練しているところを空襲し、20 余人を死傷。4 月 10 日には、趙城県永楽の砲楼を空襲した。すべて「連合国軍機」による。

■ 1945/04/29「盟机火烧临汾城，毁敌伪房屋仓库数百间」

（临汾讯）本月十二日上午八点钟左右，盟机十八架飞袭临汾，投下大量烧夷弹，把临汾城内敌伪机

关商店所在地烧得一塌糊涂，洪家楼附近敌人一座大买卖「三三商店」（资本总值一千三百万元伪币）被烧得一乾二净，其他敌伪机关住处也被烧掉二三百间。东门楼及东□城子内清水池塘则被炸坏。十六日清晨，盟机十八架又炸临汾，把敌寇火车站附近的野战仓库用烧夷弹烧毁，这仓库是晋南敌人一个大仓库，里面储存大量布匹・被服・大米・洋面及缝纫机，这下子都烧光了。还炸死敌伪人员九十名。附近发电厂・东关敌伪面粉公司全部建筑及敌宪兵队部也完全炸毁，宪兵队部内敌伪死伤三十余人。（王波・彭平・加力・朱玉他）

➡ 4 月 12 日、「連合国軍機」18 機で臨汾城内を焼夷弾で空襲。城内の商店街を焼き、日本軍やかいらい軍の機関や住宅 300 室近くを空爆した。4 月 16 日早朝、18 機で臨汾を空襲し、駅舎近くの日本軍野戦倉庫（山西省南部で最大の日本軍倉庫）を破壊し、日本兵かいらい軍兵 90 人を死傷した。同時に、発電所・製粉工場・憲兵隊司令部なども空襲し、憲兵隊内の日本兵かいらい兵 30 余人を死傷した。

■ 1945/06/09「本区周围，盟机连续猛炸敌伪」

（本报讯）从四月十日至五月十二日，一个月时间，盟机连续向本区周围敌人进行猛烈轰炸，现综合各地通讯员来讯报导如下：四月十日盟机在靈石许家店炸毁敌火车头两个・车皮十辆・汽车四辆，炸死敌军三名，伤九名。下午又在富家滩炸毁火车头一个・车皮八辆・汽车八辆，炸死日军三名，矿警十余名。十一日沁源敌向漫水撤退途中，盟机四架向下扫射，毙敌伪三名，汽车□辆，洋马八匹，骡三头，驴两头。十二日盟机十八架又在临汾东门附近投燃烧弹数枚，烧死鬼子八名，毁房屋四十余间，当日又在平遥车站投弹数枚，将所有房屋全毁掉，烧毁敌棉花一万余斤。十三日下午一时，盟机四架，在沁县车站炸毁火车头两个，车皮八辆，在城关炸死敌伪百余名，洋马七匹。返回时又在长子城南高庙据点投弹，炸死敌三名，伤十余名。十四日，盟机路径平遥张兰时，炸坏敌火车头一个。十七日至二十日四天内，每天盟机都在各地川流不息的轰炸。五月一日早晨，盟机四架轰炸介休石河桥，炸毁敌石桥三孔，水塔一座，炸死敌兵四名，伪军两名。上午又在义安车站投燃烧弹，炸毁列车四辆，车头一个。（五月）三日下午二时，又在石河桥敌据点上空投弹，炸毁敌碉堡一座，火车头一个，炸死敌人六名。五日早晨，盟机三架再炸石河桥翊秤毁石桥两孔，当即又抵义安，炸毁敌子弹库一所。六日上午，盟机两架炸介休城关车站，炸死敌人八名。返回时，又在翼城张范村投弹四枚，炸毁敌汽车一辆，炸死鬼子三名。十日下午，盟机在济源城亚桥炸毁敌汽车 × 辆，炸死鬼子八名，伤五名。十二日下午四时，盟机四架，在白晋路上炸毁由高平北驶的四辆汽车，伤敌伪七名。现敌占区群众都纷纷离开城市与敌伪据点，临汾太阳镇群众仅剩十余家。（克明・张良・一新・戈舞・王植・树峯・张斌・鹏飞・明德・士威・弘毅・金声・守信・斌命）

➡ 4 月 10 日、南同蒲鉄道の霊石許家店液を空襲し、機関車 2 両、車両 10 両、自動車 4 台を破壊し、日本兵 12 人を死傷。4 月 11 日、4 機で日本軍を機銃掃射、4 月 12 日には 18 機で臨汾東門附近と平遥駅舎を空襲した。4 月 13 日、4 機で沁県駅舎と城内を空襲、4 月 14 日、平遥の張蘭駅舎を空襲した。4 月 17 ～ 20 日も毎日空襲。5 月 1 日、4 機で介休県の石河橋を破壊し、義安駅舎を空襲した。5 月 3 日にも石河橋を空襲し、5 月 5 日には 3 機で石河橋と義安の弾薬庫を空襲した。5 月 6 日、2 機で介休県城関駅舎と翼城張範村を空襲した。5 月 12 日、白晋公路を高平から北上中の

日本軍車両4台を空襲した。日本軍占領地区に居住する中国民衆は次々と占領地区から移動している。すべて「連合国軍機」による。

これらの空襲記事は、たいへんに具体的で興味深い。空襲は「連合国機（盟機）」によって実行されたが、事前に抗日地区の情報員による誘導があり、事後には同じく情報員による「効果」の調査が行われたことが推測される。現地の調査情報にもとづく日本軍や傀儡軍の軍事目標に限定したピンポイント空襲だった。つまり、アメリカ軍と中国空軍とによる山西省東南部の日本占領地域にたいする空襲は、依然として『太岳日報』1944年12月27日の社論で規定された「ゲリラ的な空襲」だったのである。

おわりに

本稿で検討した論点を簡単にまとめておきたい。

第1に、中国国内の対日本軍空襲は軍事目標に限定した「ゲリラ的空襲」と戦略爆撃とがあった。1944年12月27日の『解放日報』社論が語ったように、そして第5節で紹介した太岳区内の日本軍にたいする空襲が示したように、「ゲリラ的空襲」が実行された。他方で、アメリカ陸軍第14航空隊による中国国内の大中都市や台湾にたいする空襲などは「戦略的空襲」（戦略爆撃）の性格をもっていたと考えられる。アメリカ軍は抗戦後期には、中国国内の一部の大都市空襲において、人口密集地域に対しB29による焼夷弾投下を行なったから、多くの中国人も死傷したと考えられる。

第2に、1944年末の中国共産党は、既引の社論が示していたように、「今後採用すべき戦略」として「戦略的空襲」を肯定的に考えていた。重慶空襲をはじめとして長期にわたり戦略爆撃を受けてきた立場として、それを反人道的な戦略と考えるよりも、対日戦勝利に結びつく戦略と考えた。それとの関連では、アメリカ軍による戦略爆撃の極致ともいうべき1945年3月10日の東京大空襲や広島・長崎の原爆投下にたいしても、『太岳日報』の空襲記事をみるかぎりでは特段の関心をもたなかったようである。この問題点については、稿を改めて検討してみたい。

最後に、当初は「中国空軍アメリカ志願隊」（AVG部隊）隊長として、後には第14航空隊司令官として蒋介石と良好な関係を持ち続けたシェンノートはどうなったか。シェンノートは、1945年7月、第14航空隊司令の退役を希望した。背後には、スティルウェルの後任の在華アメリカ軍中国戦域司令官ウェデマイアーとの確執があった。シェンノートは中国政府の首脳に惜しまれて、ウェデマイヤーに解任され、8月1日、出国した【20】。

残された課題についてふれておきたい。本稿は主として『太岳日報』（1944年4月以降『新華日報　太岳版』）に掲載された空襲記事に限定して分析した。空襲記事から判明するように、情報源の多くは在華アメリカ軍司令部公報だった。それゆえ、第1に、本来ならば在華アメリカ軍司令部公報に遡って中国空襲を分析しなければならなかったが、今回はその作業はしていない。情報源に遡ったならば、さらにリアルに中国国内空襲にアプローチできるはずである。第2に、抗日根拠地周辺の日本軍占領地に対する空襲についても、今回は山西省東南部を対象にしたにすぎない。中共

系抗日根拠地関係でも、晋察冀辺区周辺であれば『晋察冀日報』を、山西省西北部周辺であれば『抗戦日報』を、というふうに他の史料を検討する必要があろう。当事者の記録や回想の収集分析も不十分であった。日本人の記録のなかにも証言があった。一例をあげると森金千秋の記録で、「（1944 年 9 月 5 日）米機 P51、B29 の編隊が再三、祁陽に飛来し、城内と橋梁を銃爆した。米機の攻撃をうけて、たまたま城内に入城していた歩兵第 65 聯隊の第 3 大隊は、米機の集中攻撃をうける結果となり、大隊長の田村武夫少佐以下 12 名が戦死し、将兵の多数が負傷した。また、歩兵第 104 聯隊第 2 大隊にも多数の死傷者があった」という【21】。第 3 に、中国国内空襲に関与したはずの抗戦時代の中国政府の軍事航空についての分析も不十分であった。引き続き史料発掘を進めて、以上の課題についても考察を深めたいと考えている。

注

【1】バーバラ・W・タックマン、杉辺利英訳（1996）『失敗したアメリカの中国政策』朝日新聞社、280 ～ 281 頁
【2】タックマン（1996）、283、298 頁
【3】タックマン（1996）、565 頁
【4】馬毓福編著（1994）『1908-1949 中国軍事航空』航空工業出版社、北京、508 ～ 512 頁
【5】周斌・鄒新奇（2011）『中国空中抗日全傳』鳳凰出版社、150 ～ 156 頁。馬毓福（1994）、516 頁
【6】馬毓福（1994）、517 頁
【7】周斌・鄒新奇（2011）、154 ～ 156 頁。馬毓福（1994）、519 頁
【8】周斌・鄒新奇（2011）、163 ～ 168 頁、254 頁「飛虎隊参加的 16 次主要空戦一覧表」。ただし、魚佩舟主編（1993）『美国飛虎隊 AVG 援華抗戦紀実』西南師範大学出版社、8 頁（原載は重慶『新華日報』1942 年 1 月 8 日）では、昆明防衛戦を 1941 年 12 月 24 日と記述していた。
【9】馬毓福（1994）、520 頁
【10】馬毓福（1994）、520 ～ 521、526 頁。昆明市博物館 Flying Tigers Museum 展示、2018 年 3 月 8 日参観
【11】馬毓福（1994）、522 ～ 525 頁。昆明市博物館 Flying Tigers Museum 展示、2018 年 3 月 8 日参観
【12】韓永利（2003）『戦時美国大戦略与中国抗日戦場（1941-1945 年）』武漢大学出版社 ,204 頁
【13】吉田一彦（1991）『シェンノートとフライング・タイガース』徳間書店、286 頁
【14】馬毓福（1994）、526 頁
【15】詳細は、笠原十九司（2017）『日中戦争全史（下）』高文研、285 ～ 312 頁
【16】吉田一彦（1991）、251 頁
【17】潘洵、柳英武訳（2016）『重慶大爆撃の研究』岩波書店、3 頁
【18】昆明市博物館 Flying Tigers Museum 展示、2018 年 3 月 8 日参観
【19】馬毓福（1994）、526 ～ 527 頁
【20】趙家業（1998）『陳納徳』遼海出版社、北京、176 ～ 177 頁
【21】森金千秋（1981）『湘桂作戦』図書出版社、193 頁